

## 台紙付写真



写真1 篠原写真館



写真2 金子写真館

写真撮影技術が日本に伝来したのは幕末の嘉永元(1848)年といわれています。現在では、写真は印画紙に焼き付けされず、パーソナルコンピュータやスマートフォンの中にデジタルデータとして存在していることが多いわけですが、モノとしての写真の場合、古い写真といえば、紙を何枚も重ね合わせて作った台紙に紙焼き写真を貼り付けた“台紙付写真”でした。デジタル全盛の現代にあっても、婚礼や七五三、成人式など人生における特別な日に撮影される写真の中にその姿を見ることができますが、台紙付写真の多くは、写真撮影技術が写真師によって独占されていた時代に撮影されたものなのです。

しかし、当館で把握している台紙付写真 1,530 件のうち、約半数にあたる 761 件には撮影年代に関する情報が今に伝わっていません。その写真がいつ撮影されたのかがわからなければ歴史資料として活用できないことはいうまでもありません。

いっぽう、写真台紙もよく観察してみると、大きさ・台紙の色・写真を貼り付ける枠のデザインや施文方法、写真館のロゴマークの種類、写真保護のために付けられた紙や表紙といった附属品などの点で違いがあります(写真)。近年、博物館や写真史研究者などによって、それらの特徴、中でも写真館のロゴマークの違いなどを分析することによって、撮影年代を特定、あるいは一定程度まで限定できることがわかってきました。つまり台紙付写真をより広く歴史資料として活用できる可能性が高まってきたのです。

飯能で最初に創業したのは金子写真館で、明治 19(1886)年のことです。その後昭和初期までに、篠原、新井、津森の 3 つの写真館が次々と誕生しています。飯能の町に写真館ができたことによって、写真撮影の機会は以前に比べて格段に増えたことでしょう。台紙付写真は先に述べた婚礼写真などを除けばほぼ戦後には見られなくなりますので、台紙付写真自体、明治中期から戦前期の貴重な画像記録なのです。